



二日目の朝。

鳥の鳴き声とともに、ノックが響いた。

「おはようございます」

「ああ」

「起きてたんですね。ご飯は食べましたか？」

「……」

「ええと、体は拭けましたか？」

「拭いたよ」

「よかった。それなら水を交換したいので、タオルと一緒に出してください」

「血だらけのタオルだ、渡せない」

「血のついたものをそのままにしておくほうがよくないです。お願いします」

「……はあ、わかった」

「朝ご飯を作りますから、その間にトレーも出しておいてくださいね」



足音が離れていき、遠くから食器や鍋を扱う音が聞こえてくる。

その間に手つかずのトレーと血溜まりのようなボウルを出した。

少女に見せるようなものではないが、本当に大丈夫だろうか。

しばらくすると、またノックがあった。





「朝ご飯、どうぞ。——やっぱりひどいけがをしていたんですね」

「大したことないよ」

「……。私はこれから山をおりて、麓<sup>ふもと</sup>の町で買い物します。なにか欲しいものや必要なものはありますか？」

「描くものを……」

欲しいものと問われ、とっさに口からこぼれた。

「なんですか？」

「いや、なんでもない」

「なにか言いかけてましたよね、なんでも言ってください」



「それじゃあ、行ってきますね」

「ああ」

「帰りは夜になると思います。ご飯は作れませんが、大丈夫ですか？」

「……君は、どうしてここまでしてくれる？」

「けが人を放っておけないだけです」

「それだけ？」

「ほかになにかありますか？」

「……いいや。わかった」





「スマレは安静にしてくださいね」

「君は、山をおりる自分の心配をしなよ」

少し間があってから「そうですね」という声が聞こえ、足音が遠ざかっていく。

バタンと扉の音がして、静かになった。

僕は静寂に身を委ね、目を閉じて眠りについた。



買ったものを抱えて山道を歩くというのは、とにかく大変だった。

思っていたより時間がかかってしまい、日もとっぷりと暮れている。

なんとか小屋に着き、買ったものをテーブルに乗せた。

ろうそくに火をつけてから、扉をノックする。

「戻りました」

「おかえり。……なんだか、疲れてる？」

「たくさん買い物してきたので。画材も買ってきましたよ」

「本当に？」

「当然です。扉の前に置いておきますね」


「ありが、とう」

「ふふっ、どういたしまして」

「どうして笑ったの」

「素直だなと思っただけです」





「……ただでさえ扉越しでしか君を知らない。警戒するのも当然だ」

「そう、ですよ。けがはどうですか？」

「良くなってる。もうすぐこの小屋から出ていけるよ」

「そういうことを言わせたいんじゃないくて……」

「なに？」

「いいえ。ご飯、作りますね」

調理台に立ち、買ったばかりの食材を取り出す。  
新鮮な野菜とお肉は今日しか食べられないだろう。  
いまだ慣れない包丁で食材を切り、煮込んだ。  
その間にお湯も沸かす。  
数十分後、完成したご飯とお湯とタオルを扉の前に置いた。  
ノックをして、話しかける。

「ご飯どうぞ。そういえば町へ行ったときに聞いたのですが、今は流星群の季節だそうです」


「りゅうせいぐんって、なに？」

「流れ星の大群です。ここは空が近いから、きれいに見えるそうですよ」



「流れ星、か……」

「スマレの部屋からも見えるといいですね」

そんな話をしていたら、いつのまにか雨の音がしている。  
山の天気は変わりやすいというのは本当らしい。  
帰ってくるときに降ってこなくてよかった。







けれども、この雨じゃ流れ星はおろか、星空さえ見えない  
だろう。

私はロフトから上<sup>うわ</sup>掛けを持ってきた。

「雨が降ってきたので上掛けを置いておきます。お湯もあ  
りますから、体、拭いてくださいね」

それから冗談を言うように、けれども、真剣な声で告げた。

「……念のため。ご飯に毒なんて入ってませんよ」

自分のご飯を持ち、ロフトへ上がる。  
食べたらずぐに眠気がきて、意識を手放した。

